林　市兵衛（はやし　いちべえ）

アメリカ製量産時計に追いつけ追い越せ
－掛時計を国産化、明治のイノベーター－

林　市兵衛（1859 ～ 1926）
出典：『名古屋時計業界史』1953

■幼少期から時計商の家業に従事
－掛時計を製作することを決意－

名古屋で時計商を営んでいた林市老は、1870（明治3）年、横浜のクロック商館と早くも直接取引をはじめ、アメリカより輸入のボンボン時計（掛時計）の販売権を獲得し、好調な売れ行きで店は繁盛していた。その息子の市兵衛は、幼少期から家業に従事し、10代前半で西洋の文化と先駆的な機械を体感したのであった。

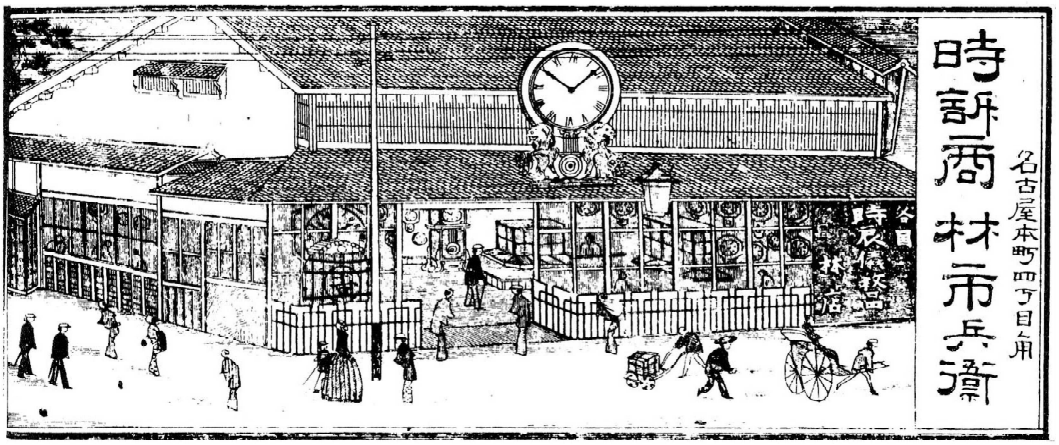
1873（明治6）年、市兵衛が14歳のときには、政府が「太陰暦」から「太陽暦」に改めたことにより、それまで「刻」に馴染んでいた市民の生活リズムが西欧式に「分」単位の時間感覚に一変し、社会システムの急変革に対応しなければならなかった。この背景が、掛時計の輸入・販売を後押していたのであった。市兵衛は、安い価格ながら正確に時を刻むアメリカ製時計が、専用機械を使って大量生産されることを知り、これを輸入に頼らず自分で製造することを決意したのであった。

林時計の四ツ丸掛時計
掛時計：博物館明治村蔵

■掛時計の製造工程の確立と時盛舎の設立
―名古屋を時計産業集積地に―

1880（明治13）年、市兵衛20歳の時、アメリカ製掛時計を模範として掛時計製作の第一歩を踏み出した。当時は、国内に時計の主要部品の歯車、ゼンマイなど精密な金属部品を作るための工作機械などなかった。そのため熟練した錺（かざり）職人（真鍮加工）を雇い時計部品を工作する機械を作ることから始めたのである。これらの時計部品加工用の工作機械の製作には困難を極めたが、1883（明治16）年に、掛時計製作用の機械を製作することができた。

市兵衛は、自宅に時計製造工場を設置して、輸入されていた八角尾長、四つ丸等のアメリカ製量産時計を模範として、掛時計の製造を開始した。1887（明治20）年には、製造も順調になり「時盛舎」（林時計）を創設し、本格的な時計量産を開始した。時盛舎の事業成功と発展は、他の業者にも影響を与えた。そして、時盛舎の創業から数年後には、名古屋地方では10社以上の時計工場が新たに設立され、名古屋が時計の一大生産地として発達したのである。林市兵衛は、苦労して作り上げた時計製造システムを公開し、時計製造技術を広めるとともに、1903（明治36）年には愛知県時計製造組合の発起人の一人として時計業界の発展に貢献したのである。（梅本良作）



林市兵衛の店と時計製造工場　　出典：『尾陽商工便覧』1888